

タイ・フィールドスクール報告書

平成 21 年度入学
タイ・フィールドスクール
調査地：マレーシア
井上貴智

キーワード：イスラーム、近代、科学、組織、利益

自分の研究テーマについて

自身の研究は、近年の「科学のイスラーム化」と呼ばれるような活動にかんして調査している。近年科学などの学問の世界でムスリムが第一線で活躍することが多くなってきた。彼らは学問の世界では知識人として見られている一方で、ムスリムとしての知識人は現在でも伝統的なイスラームの教育を受けてきた知識人に限られてしまうことが多い。自身の研究では、このような立場に置かれている、近代的な学問を修めたムスリムがどのようにイスラームと向き合っていくべきかということを考えている動きに着目し明らかにしていきたい。

これまでに明らかになったことは、「科学のイスラーム化」に関わる議論が、特定の地域で独自に議論が発展していったものではなく、国際的に一定の議論がくみ交わされて成り立っていったものであるという点があげられる。実際に、英米、中東、南アジア、東南アジアなどそれぞれの地域で活動があり、互いに意見の交流が行われていることが明らかになった。

また、「科学のイスラーム化」という議論は、国際的に一定の議論の場があるにもかかわらず、議論の全体像があまりはつきりしていない。各論者がそれぞれの見解に基づいて持論を述べている形のものが存在しているだけであることが多い。ここで本研究では自分なりに体系化を試み、さまざまな事例への分析概念を構築していくことも試みている。

フィールドスクールで得られた知見について

今回のタイ・フィールドスクールでは、見学した NGO 代表のこれまでの研究成果を実務の活動にフル活用している姿をうかがえることができた。これを通して、大学院で培ってきた研究は研究職においてだけでなく、実務をこなすにあたっても利用価値を見出すことができることがわかった。たとえば、今回見てきた NGO では、村の支援の一つとして地図の作成のサポートというものがあった。これは、代表の専攻である地理学に基づいて、長年その付近の地域を調査していて事情に精通していることや、地図の作成方法にかんしてノウハウを持っているからこそできることであると考えられる。

一方で、「実務」ということを考えた場合、NGO のような非営利目的での支援活動だけでなく、仕事に利益が結びつく、一般的に考えられている「仕事」にも焦点を当てていかなければならない必要があるということがいえる。自らのやりたいことにかんして、寄付や支援をとおして経済的にまかなっているという構造は、研究機関でも、NGO でも大きく変わらないといえる。しかし、「実務」や「仕事」と考えたときに、自分たちの持っているもので利益を生み出し、自らのやりたいことに対して自分たちで

投資できる力がつけられるというようなモデルも見ていく必要があると考えられる。研究活動、実績がどのように利益を生み出すことができるかというモデルも「実務」の一つとして見ていきたい。

フィールドスクールで学んだことをどのように研究テーマに生かせるか？

今回のフィールドスクールでは、村人組織の活動と、それを支援する NGO の活動を見てきた。自らの研究テーマも、イスラームの学術的組織が対象となっているため、組織の活動という点で、実際の動きを目の当たりにすることができ経験になった。とくに、組織の活動自体が村人主導で動き出していること、うまく権力とバランスを保ちながら活動していることが参考となった。現在報告者が見てきたイスラームの組織は、何らかの形で外部にておこなわれている議論に触発される形でそこでの議論が発展しているケースが多い。もし、今回のフィールドスクールのようなケースのように、自発的にその組織の活動が始まった場合何が発端となるのか、検証の余地があるように思われる。また、権力とのバランスにかんしても、どの組織を見ていくにあたっても政治的側面を見落とさないようにしなければならないということが感じられた。

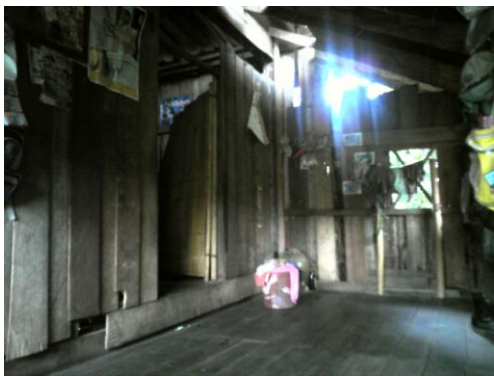


図 1 ホームステイ先の家の様子



図 2 ホームステイした村の田園風景



図 1 ビルマとの国境